

村野次郎創刊

香 蘭



二〇二〇年(令和二年)十一月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第十二号

2020年(令和2年)12月号

第 97 卷

第 12 号

通卷 1080 号



香 蘭

2020年(令和2年)12月号
第97巻 第12号 通巻1080号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(64) 鈴木桂子 表二
 作品 一

推薦香蘭集 三
 香 蘭 集 二

近詠十五首 「三菱の街」 飯島・石井・伊藤(美)・伊藤(康)・大井田
 作品一特選(十月号) 高島・内藤・長野・本田・山中・横山
 岩田・長田・桑山・中井・松沢・丑山

作品二・三特選(十月号) 小原・小林(純)・庄司・中村(陽)
 歌の生まれる場所(95) 川原優子

村野次郎への旅(129) 連作が喚起する詩の宇宙 加藤英彦歌集「プレシビス」をめぐって 千々和久幸
 エッセイ・自由研究「小さな私的な短歌の旅」 高田みちる

焦点(十月号)「新型コロナと上手に暮らそう」 坪原裕
 七首抄(十月号) 武藤・長田・栗原・中村(陽)

牧野道子「留学」評(十月号近詠十五首) 松原義清
 作品一 田中あさひ
 作品二 渡邊典之
 作品三 田淵宏之
 香蘭集 田中あさひ

文法あれこれ(19) 森(幸)・青山(侑)・有馬・八木橋
 緑地帯 小原裕光
 他誌拜見117 千々和久幸
 明宝研究会第一一七回九月例会 桜井京子
 歌集管見 岡本幸緒歌集『ちいさな襟』評 市川義和
 高旨清美歌集『雀のミサ曲』評 市川義和

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 和雄
 歌会及び会合・会員消息・他 和雄
 編集後記・新宿日記 和雄
 表紙絵 中村 陽子「重なり合って」

目次・緑地帯カット 和雄
 表紙絵 和雄

村野次郎作品 私の愛誦歌（64）

ひびわれて土熱めきたつ日の盛り

風死して目に動くもの見ず

口遊むには重い風景であろう。愛誦歌にはそぐわないかもしれない。しかし、私には魅力的な一首である。

太陽の照りつける夏の午後、寝けつくような日照りに、地面は熱く乾いている。その日盛りのさ中、ヒタリと風の止む時刻がある。草や木やものが、いつせいに動きを止めて死んだように静まり返る。目に動くものはなく、耐え難い暑さだけが身体を包んで来る。そんな情景だろうか。「ひびわれて」の具体、「風死して」の比喩、「見ず」でしめた結句が、この作品世界の高さを支えている。

気になるのはそこに立つ作者の内面であろう。動きを止めた世界でひとり作者が見ていたものは何だったのか。おそらくその風景の先にあるもの、作者を待つこれからであり、その先を行こうとする作者の秘めた思いではなかったか。作者41歳、白秋を離れ、「香蘭」の主宰として立った前後、昭和十年の作である。

（短歌新聞社文庫『樽風集』20頁所収）村野次郎三首（二）

『樽風集』

四 選 者 の 作 品

推 敲 平塚 千々和 久幸

推敲は句を「推す」「敲く」に留まらず頭をたたき机を叩く
推敲は愉しきかなや気の乗らぬ詩句にコーヒーこぼしたりして
「浴室」と詠みしを「厨」に直されて造花を飾る場所嘘になる
推敲を重ねるほどにばらけゆきつまらぬ歌になることも知れ
推敲の苦心見ゆるも愛嬌ぞ報われざると誰か言うべき

添削に出来不出来ありどう見ても原作越え得ぬこともしばしば
捨て歌と屑歌ばかり連ねあるノートは山の手線に忘れよ

推敲に飽きたる時は鼻歌に「水行十日陸行一月」

風と向日葵 我孫子 丸山 三枝子

夏休み果てると来たよ二年生きみの背丈はまた伸びていて
じじばばと少年と犬とゆく水辺 夏の陽射しのゆるめる頃を
少年の投げたる石はつつつと飛沫を生みて遠ざかりゆく
飛沫たて奔りゆきたる水切石がふつときらめき沈みゆきたり
黄に染まるひまわり畑をうねらせてわたりゆく風 空に吸われつ
走れなくなりたる夫と犬が来るひまわりの花あかるきなかを

向日葵のなかゆく二人と一匹のその一匹が見えずここから
この世には見えない実もあるならん影そよがせて風中を行く
何かを忘れて 東京 桜井京子

千日も万日も紅く咲きたいね千日紅の永久なる願ひ
庭すみに確かに咲いてゐたはずの夏水仙はあとかたもなし
大切な何かを忘れてゐるわたしきのふの路地の赤いカンナよ
うすあをき槐散る日よあああれは報復だつたと告げてやらむか
死といふはかくも簡潔あふむけの蟬のむくるは見てとほるのみ
いくへにもおほひつくせる暮の葉の記憶のやうなり紫の花
もうここで別れませうといふやうなY字路に来つ黄昏ふかし
家持の夏痩せによしといひたれば鰻買ひ来ぬスーパりのうなぎ

一 口 腔 横浜 渡 辺 礼比子

顔の上の歯科医と助手のやりとりの「ゼツソク」は多分「舌側」と書く
実によく磨けています 顔見えぬ歯科医の若き声に褒めらる
新宿区歯磨大会銀賞がおさなきわれの誇りなりけり
歯科診療明細書にぞわが口は「一口腔」と教えられる
舅享年八十五歳ご立派な歯ですと隠坊が声低く言う

食卓に入れ歯の話すべからず古風な母校の教えのひとつに
食べられる魚肉つきつき捨てながら醜む緋色のスープ・ド・ポアソン
そう、こんなノリがいいよね軽やかにピリジョエルの歌転調す

作品一特選



(十月号作品から)

桜井京子 選

退院後の日々

川崎 飯島 智恵子

小判草の挿れいたりこの坂道を下りて行けばバス停に着く

こんなことではいらぬベッドからやおら降りたがどうにもならぬ

退院の予後は如何と歌友から逗子の白子が今年も届く

こんなはずではなかったなどと思うまい良かれと決めた膝の手術を

ままならぬ身にて暮れたり秋海棠の茎の赤さに目をとめながら

・子供の日々を短歌と共に戦い、その力が快癒の日を引き寄せる。

習志野隕石

習志野 石井雅子

落下せし火球の欠片はわが街に 習志野隕石と登録さるる

この人も寂しきひとり指さきにバステルカラーを淡く点して

角筈の地名が今は歌舞伎町覗いてみたいホスト歌会

南風強く吹く日は潮の香と出でゆく船の汽笛聞こゆる

思ひ出の深きものから失せてゆき片方残る琥珀のピアス

猥雑な京大名物立看板消えて百万遍はのつべらぼうに

・好奇心の強さが様々な事象を歌にし、輪郭が際やかで印象深い。

この坂もしや

川崎 伊藤 美恵子

夾竹桃そよぐ樹下の待合所 発熱外来に受診を待てり

子どもたちもかかりし病院の夾竹桃いまま元気に枝分かれして

レントゲン室、CT室へと院外をたどれば脱出ドラマのごとし

地下にあるCT室へと坂下るこの坂もしや黄泉平坂

ああ死ぬんだと思いつつ死にたしむらさきのあやめが雨に濡るるごまに

・四、五首目は死を背中合せにして歌い、その表情はあつげうかんと明るい。

蟬の声

東京 伊藤 康子

雨を避け網戸にしがみつく蟬はちつとも鳴かずにやがて落ちたり

長梅雨に待たされ続けた初蟬の声はいきなり絶叫となる

チャネルをかえればテレビショッピング残り五点と煽る深夜に

合併でまたも社名が変わりたるやつてる仕事は変わらないけど

旧社名での名のり厳禁と回覧が来たけど口は勝手にすべる

・口語の強みを生かし、身辺の些細な変化を巧みに切り取って歌う。

ウイズコロナ

川崎 大井田 啓子

青葉道かるやかに来て目標はスーパードである危険地帯ぞ

透明なアクリル板に隔てられレジの女性は無表情なり

ビニールの手袋ごしのレジの手にクレジットカードを渡す無言で

帰りぎは消毒液に手を湿すコロナよお前の死骸が見たい

ひさかたの初夏の日差しよゆきゆかばいづこもコロナ王国栄ゆ

・コロナ禍に罹患するように見えて、呑み込まれない強かな姿勢が良い。

風には風の

鎌倉 高畠憲子

コロナ見舞ひの電話の声はレイさんなり歌をやめたらあかんでと言ふ
自肅期間に収蔵庫より見つけたり母の最期の手製梅干し
部屋を丸く掃くやうなわが体操を正されてをり見本動画に
アキレス腱ゆつくり伸ばし静止せり我慢のしどころ考へながら
風には風の雨には雨の音ありぬ われにはわれの堅琴の欲し
・困難な中であつて自己を凝視し、歌で自己を立て直そうとする

初夏の朝

鎌倉 内藤美也子

電柱の下に一足靴がある見上げてゐるがだあれもゐない
こほろぎの死体に群がる蟻あまた 死は生へと引き継がれたり
夕つ方つぶれ梅の実が木の椅子に二つ並んで静かにありぬ
刈草の匂ふ野道を犬とゆく青柿の生る初夏の朝
亡き夫の好みし竹が六月の空に向かつて突き上げてゆく
・一、二、五首目は詩を拗ろう眼があるが、一首目の下句は過剰か

バラのタトウ

横浜 長野道子

港へと続く運河を走りゆくパトロール船に今日は手を振る
街角で立ち話する人のふえ密ではないが蜜を匂わす
落語家がはらりと羽織を落とすように夫はわたしを見放す気にか
昔むかしの恋物語のもやもやはスモークツリーだったと思ふ
家こもる二ヶ月過ぎて体型のふくふくとなりマスクが似合う
・天性の明るさが歌に弾みと広がりをもたっている

コロナの産物

長崎 本田民子

六十年添いし夫の平熱が三六・五℃と知りたるはコロナの産物
ケータイに豪雨の知らせけたたまし胡蝶蘭の鉢を先ずは取り込む
予防策やるだけやって台風も豪雨も天にまかせて眠る
三食と掃除、洗濯それだけで一日が過ぐ退屈にあらず
世に出でて二月満たぬ男の子なれ曾祖父に抱かれ大あくびする
・人生の機微を肯定的に捉えて安堵感を与える歌である

BCG痕

流山 山中光枝

約束も嬉しさもない日曜日なぜか早々目が覚めてをり
空いても乗せてくれないエレベーターそうかコロナで定員四名
もう消えて無い筈なのに今見れば鮮明にあるBCG痕
アパートの入居者募集の旗ゆれて夕べ新たに明かりが点る
「年寄の作った野菜を盗らないで」案山子が夜通し番をしており
・折々に目にとまった事柄に彩りを与え、それは歌の力であろう

デイスタンス

宇都宮 横山慎夫

入りたる診察室の足元に線がこどもソーシャルデイスタンス
形見なるちよつと大きめの腕時計電頭巻かねば即ち止まる
バスを待ち待つ間の本の立ち読みを本が離さず夕暮れとなる
百年に一度の雨とテレビでは百年前を知らずに報ず
生き物のようにため息つきながら動き始めたり柵のファックス
・ウィットと微かな批判精神 五首目は自身のため息も混じるか

作品二、三特選



(十月号作品から)

香山 静子 選

〈作品二〉

いつも少年

安来 岩田 明美

話し合ふやうに鴉は鳴き合ひて見事喰ひたり端無花果を
「沖繩で戦死した兄」と亡き父の語りし伯父よいつも少年
少年の伯父と父とが飛び込みし川の流れを吾は知らざり
ひくひくと喉動かし蛾に向かふ守宮はハントアーここに生き継ぐ
ガラス戸に夜毎這ひ来る一匹のヤモリの足裏しみじみと見き
静かなる明るさのなか紫陽花の色の増しゆき梅雨明けなむや
・人間のみならす小さな生き物にも愛情を注いでいる

コロナ禍

長野 長田 庸子

明け初めのしじまに交わす鳥の声 地を這う者はコロナに脅え
三食をしっかりと食べて養生なせばコロナ太りに身を持って余す
澄み渡る空にサソリ座アンタレス赤き輝きコロナにも似て
炎暑にうだる下界に冷気をと「山の日」にテレビは映す白馬雪渓
コロナ禍に追い打ちかける気象なり日本列島梅雨の豪雨は

夏雲の湧く高空に雨を待つ災禍の九州いたみながらも

・コロナ禍への怖れを詠んでいて現実感がある

球磨川

長崎 桑山 君子

荒れ狂う球磨川の流れこの川を下りゆきたる若き日ありき
学力と知能の相関如何なりと調査にいとみし若き日のわれ
前山も雨に煙りて降りしきる今日のリハビリ休むとするか
降りつづく中を歩いてバス停まで花柄の雨靴、花柄の傘
この夏は天空の馬あばれいて南も北も気象はあれる
降りつづく雨に視界は遮られ庭の草ぐさ小刻みに振るう

・今年の異常気象に悩まされる作者

夏の約束

宇治 中井 房江

これもまた新様式か図書館に入るに連絡先を書かさる
マスクの口思わず押さう三階の窓より紋白蝶の入り来て
ようやくに開きし図書館湿りおぶる風の入りくる静かなる午後
先生の練名らしきが飛び交いて下校のマスク忙しく動く
文化祭、体育祭は中止です校内放送風が伝え来
蝙蝠穴に行くとう夏の約束を果たさぬままに六十年過ぐ
・マスクを表面に出して現代の世相を詠んでいる

たまにはいいか

さいたま 松沢 みどり

昼休みはひとり静かに過ごそうと店に入れば所長と部長
促され隣の席に座りたり「奇遇ですね」と笑ったりして
エビフライ定食頼んだ所長よりエビフライひとつ分けてもらえり

早食いにならないように気をつけてゆっくり食べた味分からは
会計に立てば所長が後ろから千円札を渡ししてくれる

「ごちそうさまでした」と笑顔で礼を言うこんなランチもたまにはいいか

・思いがけぬ上司との出会いを楽しく詠んでいる

〈作品三〉

生簀に届く

さいたま

丑山 眞弓

梅雨明けを待ちわびながら頑張つて咲いているなり日々草は
黒豆の煮具合視ると言いながらカップに入れてプランチとする
「焼きますか、生にしますか」の板前の大きな声が生簀に届く
明けてくる朝の光はゆるやかに雲間をよぎる淡きオレンジ
うす墨の一筆書きをしたような雲の濃淡ありてあかとき

・肩の力を抜いた庶民性が何とも言えず魅力的

菓ごもり

鎌倉

小原 裕光

ひまわりの花柄模様のワンピース梅雨の晴れ間をさつそうと行く
菓ごもりの我に小綬鶏呼びかくる若葉眩しい戸外に出でよ
久々の同窓会に來ないかと電話くれたり故郷の友
自肅要請求める総理と小池知事マスクの違いが少し気になる
コロナ禍に振りまわさるるこの年は蟬も鳴かずに土用に入る

・易しい言い回しの中に社会への強い関心が見える

纏足の鳥

横浜

小林 純子

主張なきわが身代りに鳴き上ぐる軒のインコも纏足の鳥

朝寝してまた朝寝して水紙めてちよつと蛇つばい尾つばが生える

才のみの君の歌にもやや厭きてランチのパンも則ちは砂

逆髪を振りて陽を浴ぶるもうこしの首を折る時ためらひは三三

・大胆な発想と表現、この作者の筆姿に期待する

自肅生活

横浜

庄司 健造

このままに自肅はいつまで続くやら日陰の虎杖いじけていたり
火の国に悲しみのこしわが街に悪人面の入道雲たつ

ときに飲み時に昼寝の日日なれば紛れもあらず引き籠もりなり
にんまりと十万円を分け合いてうなぎの蒲焼わり勘とする

・思い切った表現が楽しい

ポブラ並木

東京

中村 陽子

青鷲が首を伸ばして寄つてゆく釣糸垂れる男の横に

まつすぐなポブラ並木が細くなる遠近法の手本のように

庭に咲くユリの雄しべはクスクスと笑うようなり風に吹かれて
先生はフェースシルドつけぬまま講義はじめる誰も言えない
窓の外に止まぬさみだれマスクして目だけの顔がすれちがうなり
・独自の発想が読者を惹きつける



三菱の街

本田 民子

皇太子ご成婚よと通勤の船内賑わし昭和の良き日

鈴生りの連絡船にて対岸の棧橋までは七分の距離

棧橋を離るる船に猛ダッシュで飛び乗るあれは同期のイサム

三菱の街と言われしこの界限ビル三つほど並んでいたり

縁有りて三菱の町に籍を置き半世紀疾く過ぎてしまえり

路線バスに役を譲りて連絡船は惜しまれ歴史の幕を閉じたり

進水式の号砲響き町川にさわさわと波のさかのほ遡りくる

くす玉の割れて飛び立つ白鳩が旋回しつつ空に吸われき

ビル解体したる地下には不発弾ありてニュースに町は震撼

平成の穏やかな日よ工事場からまた不発弾とニュースは告げる

建造中の戦艦武蔵を狙いしがぞ的を逸れたる爆弾らしい

ひと言随想

三菱の街

不発弾の処理終わるまで犬も猫も避難せよとのおふれがまわる

ビル三つすつかり壊されレンガ造りの総合病院の建設すすむ

わが家より徒歩三分の病院は最も頼れる場所になりたり

いつよりか三菱造船が重工と変わって今も三菱の街

私が住むこの地域は、昔から三菱の街と呼ばれている。三菱造船所、三菱電機、三菱製鋼所のビルや工場が立ち並び、造船景気に湧いた頃もあった。

戦時中、建造中の「戦艦武蔵」をねらって爆撃を受けた場所だ。そのため地下に複数の不発弾が、眠っているらしい。

大きなホテルやビルの工事がある度に、地下から不発弾が発見され、その処理が終わる

まで住民は避難をさせられる。数度の避難勧告にも、あまたかと思うようになった。

令和に入り、ビルが3棟解体され、新しい立派な病院に建て替えられた。

小学校の校歌にも歌われている、世界遺産の起重機（ジャイアント・カンチレバークレーン）は106年を経た今も現役で、わが街を見守ってくれている。

村野次郎への旅（1229）

「ザムボア」と次郎（二十一）

千々和久幸

「ザムボア」（朱攀）第四卷第九號は大正七（1918）年九月五日發行。この月は河野慎吾が「同人月旦」に「村野次郎君の歌」を書いているので、少し長いが原文のまま引用する。

この一文は本号に「一頁分の餘白が出来たので」「ふと思ひついたのが、この同人月旦である」と最初に河野の断り書きがある。

村野君は「地上巡禮」時代からの古い同人で、それだけ同君には親しみもあり、また感服させられる歌もあつた。

「地上巡禮」は大正二年十一月に創立され、翌三年九月に創刊されたものである。村野君は確か三年の夏頃に入社したのだと思つてゐる。創刊誌には「矢羽根姿」五首が採録されて清新、潑刺な元氣を見せ、二號に「羅漢相」が一首第四號に「大提灯」十首掲載され、初

めて獨立の歩みをしてゐる。

此の當時は頗る選抜評準も厳正で、歌壇に於て最も元氣があつた時代で、白井史郎、白井英子の諸君などは創刊號當時から活躍をしてゐる。村野君は少し遅れて矢張中堅の一人となつた。この當時の同君の歌には、若々しい元氣はあつたが、まだどつしりと底力のあつた歌は少なく、氣分本位の歌が加多かつた。同君の傾向が著しく變化を見せ出したのは「煙草の花」時代からである。同誌第二號には「霜と雨」の十數首がある。

外の面には風吹きつりの夕霜にあかずあざりをする鷄の見ゆ

此の一首は同君の代表的である。作者の心境と對象とが或る点まで融合され、表現上の技巧も巧みである。

煙突の烟かすかになりはて、輝く雲の真晝なりけり

等は心境の透徹しない、極めて調子本位、氣分本位のもので前者と比較すれば著しく格段が下がる次の「曼陀羅」時代は多く「煙草の花」時代の態度、傾向を續けてゐる。

竹藪のかたへは雪の消のこりて夕ざりさむく頬白なくも

雪の湖に寒釣ると衰つけて今や土橋に入かゝる見ゆ

鐵砲山に鐵砲うたずなりにけり籠を通る風の寒しよ

燒酎の甕にうごける蟲のかけ夜風にゆれしともしびに見ゆ

などの數首は同君の「曼陀羅」時代の代表作でいくらか表現上の技巧には欠点はあるが佳い歌の部に屬してゐる。

ともしびに錢數ふると婆ひとり白髪かき垂る木枯の家

障子の蟻今はいづこに行きにけんわがこもる空のこの静けさに

竹藪に干し忘れたる白衣の折々ゆらく夜は更けたらん

などは觀照が浅い。木枯しの家と同傾向の歌は皆芝居けがあつていけない。

「ザムボア」正月號に發表された「月蝕の

夜」は「曼陀羅」時代の臭味が抜けてゐない、が三月號「枳殻垣」以來、同君の態度はや、面目を一新して、少なくとも、曼陀羅時代の態度とは別人の觀ある歌を發表してゐる。

夕畑のしぐれに寒きわが歩みこほろぎのこゑもうしろになりぬ

たまさかに屋根にのほば隣家に咲きて明るきいちほつの花

などは最近の傾向を代表したもので以前の元氣はないが、澄み入んとする靜けさは首肯できる。この心境からどう發展するか今後の問題で輕率に批評する事は出来ない。

からたちの垣のあたりに啼く犬のこころにかかり眠られなくに

夜の森に三日月か、り焼跡に面明かるく人つとひ見ゆ

家暗らくしげりて栗の花は咲けど言葉すくなく暮らす日多し

束の間を眠りしかもよ真晝間の電車に疲れ眠りしかもよ

などの數首は多少の欠点はあるとしても相當に詠まれてゐる。而し著しく他人の影響あるを認める。之れは吾々お互に注意すべき事で、村野君一人を責めるは酷であるかも知れぬ。

而し同君の態度の變化の著しいのは驚かされる。果たして之は宜い結果を齎らすか悪い所に墮ちるかは今後に就いて見なければ解らぬ、いづれ後日詳細に論じ度く思ふ。

「香蘭」人にはつとにお馴染みだが、河野慎吾と村野次郎は北原白秋門下にあつて大正七年、師の「推讃の辭」(「ザムボア」復活號、大正七年一月號)によつて世に出た。

「：兩君とも予が元にあつて、苦節十年終始一貫して渝らず、而も道の為め永く永く予と共に隱忍自重し、あらゆる艱難と苛酷とに耐へ、遂に今や渾然たる一家の風格を成す」として日本詩歌壇に推薦されたのだつた。

つまり慎吾も次郎も白秋が眼を掛けた俊秀であつた。兩者は互いに切磋琢磨し白秋を支えたのであつた。

慎吾の次郎評は厳しくも暖かいが、ここに記された批評にそつて見ていこう。

外の面には風吹きつりの夕霜にあかずあざりをする鶉の見ゆ

・煙突の煙かすかになりはて、輝く雲の真晝なりけり

・ともしびに錢數ふると婆ひとり白髪かき垂る木枯しの家

第一首目は代表作と評された歌、また第二首目は「調子本位、氣分本位の歌」、第三首目は「觀照が浅い。同傾向の歌は芝居けがあつていけない」と評された歌である。

第一首目は好意的に讀まれているが、この時期の代表作と言われれば、先に「清新、潑刺」と評されたが「矢羽麥」の歌は落とせない。わたしたちにはやはり大正三年の「矢羽根麥シルクハットに輝けば夕日かなしくめぐりやまずも」でなければならぬ。

この一見華やかで哀切な歌は「父を埋むる日」という詞書がなければ、もつとロマンチックな世界で受容したであらう。

掲出歌の第一首目「外の面には風吹きつりの」は、手堅く活みのあるところに味わいはあるが、「心境の透徹」とまではいへない。

第二首目は、情景を詩の方へ押し返す燃焼力が不足している。第三首目は先生にもこんな歌があつたのか、という思いである。場面の作りが何となく怪談じみて、いかに芝居仕立てである。

23 香蘭 2020年12月号